

平成 30(2018)年度 NGO 海外スタディ・プログラム最終報告書

提出日	2019 年 3 月 8 日	
氏名	飯野 ちひろ	
所属団体(正式名称)	特定非営利活動法人アフリカ地域開発市民の会	
受入機関名 (所在国)	Beehive Centre for Social Enterprise (マラウイ共和国)	
研修期間	2018 年 5 月 13 日～2018 年 9 月 12 日	
研修テーマ	マラウイにおける社会起業を通じた地域活性化の取り組みと NGO の 関わり方を学ぶ	

1. 導入

1-1. 所属団体について

所属団体は、1998 年の設立から、アフリカで開発協力活動を通して、地域に暮らす人々と共により豊かな社会を実現していくことを目指して、東アフリカのケニア共和国で 20 年間、教育・保健・環境分野で社会開発の協力活動を行ってきた。活動の主体は地域に住む人々(大人たち)で、自らの役割や豊かさについて自分たちで考え、所属団体は、外部者として、それらを実現するために協力する。事業を行う上で、「中心的価値を重視し、副次的利益を小さくする」姿勢を重視し、住民がその目的と意義を理解した上で事業の実施に合意し共に活動することを心掛けている。

1-2. 研修前の問題意識

中・小規模の NGO においては、スタッフ一人一人が幅広い業務をこなす必要がある。研修員は所属団体の事務局で総務・経理および事業担当である。申請書や報告書作成では、事業の本質や活動内容の理解・把握は不可欠であるのだが、開発分野の知識や現場業務の経験が浅く、統合的な後方支援能力に欠けている自覚があった。

研修員が研修を通して社会開発の現状を学び理解すること、開発分野における基礎的な知識を習得し、事業担当として事業に統合的に関与出来る能力を身につけることは、今後事業のサポートを行う上での重要課題であると考え、今回本プログラムへの応募にいたった。

1-3. 研修テーマの選定

研修員が所属団体に入職する前に、ある NGO のボランティアとしてケニアで活動した際、NGO の理念や活動趣旨と地域住民のニーズが必ずしも合致していないこと、その差を無視して事業を実施した結果、NGO への不信感や副次的利益への依存がコミュニティに定着している現状を目の当たりにした。また、NGO が、碑益者と非碑益者間に不和を生みだす要因になった例を見聞きすることもある。こうした問題は、NGO だけの努力で解決あるいは改善できるものではなく、コミュニティを取り巻く様々なアクターとの協力が不可欠であると感じていた。

研修では、そのアクターのひとつであり、社会変革を起こすひとつのアプローチである社会起業に焦点をあてた。受け入れ団体が実際に行っている地域活性化の取り組みや、地域住民、提携するパートナー NGO との関わり方を身近で学ぶことにより、社会開発の現状理解を深め、課題の分析能力を養うことを目標として設定した。また、社会開発の現状理解／分析にあたり、特に、社会開発における住民参加の在り方、実現性及び課題と、社会開発における NGO の他者との協力の在り方を学びの重点とした。

1-4. 受入機関の選定

受入機関の選定で考慮した点は、社会開発に取り組み、住民参加の事業を行う、信頼と実績のある機関であること、加えて研修受け入れ体制が整っている機関であることの二点である。

社会開発において住民のニーズの把握に関して、受入機関は設立時より地域住民の声に耳を傾け、地域の雇用創出に社会起業という形で注力してきた。事業における住民参加は受入機関が常に心掛けてきたことであり、住民からの信頼と実績も伴っている。

また、受入機関は、パートナー団体と協力し、お互いの強みを上手く生かした事業を実施しており、海外からのインターンやスタッフ、ボランティアの受け入れを多く経験してきたこと、また、代表が自らマラウイの歴史やスタッフの心得などについて講義を行っていることから、能動的な研修の場を提供していると考え、研修の受け入れを依頼した。

1. 本文（研修テーマについて明らかになったこと、課題解決を前提とした研修実施内容の詳細報告）

2-1. 研修内容

2-1-1. 受入機関概要

本研修は、マラウイ共和国の南部最大都市ブランタイヤ郊外チロモニにある社会起業 Beehive Centre for Social Enterprise（以下、ビーハイズ）で行われた。ビーハイズは、それぞれ独立した 10 のエンタープライズから成り立ち、チロモニ地域周辺の人びとの生活の質を変革することを「ミッション」として、2007 年の設立以来、パートナー NGO と協力しながら、地域での雇用創出や専門技術を学ぶ学校の設立など、住民のニーズに寄り添った事業を展開している。

2-1-2. 研修内容

研修の構成は、主に以下の通り。

- ①各エンタープライズの見学
- ②代表ピーター・カタ氏によるメンタリングと講義
- ③Mother Teresa Childrens' Centre での研修
- ④Mother Teresa Childrens' Centre でのインパクトアセスメント

各構成の詳細内容を以下に記載する。

① 各エンタープライズの見学

研修開始後 1 か月程の期間は、10 あるビーハイズのエンタープライズを回り、マネージャーや職員によるオリエンテーションや、ミーティングへの参加、インタビューなどを通じ、ビーハイズの組織構成、各エンタープライズの事業内容や役割、コミュニティとの関係性を学んだ。

● Beehive Design/Tailoring School

ビーハイズ設立と同時に運営が開始されたエンタープライズのひとつで、7 人のマダムと呼ばれる教師が、チロモニ地域の青年を中心とした 150 名ほどの生徒に裁縫技術を教える学校。イギリスから寄付された大量のミシンの、地域の雇用につながる活用方法について、ビーハイズの設立メンバーが討論し、技術伝達の場になる学校という形にたどり着いた。チェワ語で行われる Informal、英語で行われる Certificate と Diploma（上級者向け）の 3 つのコースがあり、それぞれ、designing/cutting, sewing, technical drawing, technology theory, technology practice の 5 教科を学ぶ。卒業生はミシンを安価で購入することが可能。

卒業後の進路として、Diploma コースの成績優秀者はマラウイ国内の大手工場や後述の Cycle of Good に就職する。大多数の生徒は、卒業後、自宅あるいは（男性の生徒は特に）マーケットで個人商店を開く。他、就職のサポート体制として、毎年、生徒が自分の卒業制作を発表する場でもある卒業式にマラウイのファッション業界関係者を 2 名招待しており、その場でスカウトされることもある。

- Cycle of Good

2017 年 7 月に設立された最も新しいエンタープライズで、自転車の壊れたタイヤのチューブやチテンジェ（マラウイ各地で販売されているカラフルなプリント布）を利用し、イギリスのチャリティ団体が主にオンラインで販売する商品を作っている（一部、マラウイ国内で販売している商品もある）。また、Cycle of Good のチロモニコミュニティとの合同プロジェクトの一環として、地域の職人が作る、ヤシの葉の籠や包装紙の切れ端でつくるバッグを仕入れ、上述のチャリティを通して販売している。マネージャーとチャリティの担当者間で毎月メールによる意見交換がなされ、新商品の開発や販売品の入れ替えが行われる。職人 11 人全員が Beehive Tailoring School のコースを優秀な成績で修了した卒業生である。

- Beebikes

ビーハイク設立当初からあるエンタープライズのひとつで、自転車の修理・メンテナンスや、イギリスから寄付された中古自転車の販売を行っている。スタッフが頻繁にブランタイヤや周辺の町を訪れ、自転車の相場をリサーチ、価格設定の参考にしている。価格は必ずしも安価な訳ではないが、自転車そのものの質やアフターケアの充実が評価され、チロモニやブランタイヤだけでなく、リロングウェや遠方からの顧客も年々増えている。不定期で誰でも参加可能な無料のワークショップを開催しており、自転車の修理の仕方やメンテナンス方法を教えている。11 人いる職員のほとんどがチロモニ出身である。

- Beebooks

ビーハイクの中で一番小さなエンタープライズで、職員はマネージャー1 名のみ。イギリスから寄付された本を安価で販売している。顧客の大半は本の仲卸業者であり、リロングウェやムズズ、パロンベなどマラウイ全国から仕入れに来ている。（ボランティアやインターンなど）人手がある時に、子どもへの絵本の読み聞かせを行っている。

マネージャーはチロモニ出身で、当初ビーハイクでガードマンとして勤務していた。勤務態度が評価され、Beebooks のマネージャー職についた。

- Torrent Plant & Vehicle Hire

2010 年 7 月に設立されたエンタープライズで、建設や土地の整備に使用する重機のレンタルを行なっている。重機 1 台につきドライバー1 人が割り当てられており、最短で 1 日、長いと 1 年ほど貸し出すことがある（機械だけを借りることはできない）。顧客は法人が多いが、個人でもレンタルが可能である。ブランタイヤだけでなく、リロングウェ、パロンベ、カロンガ、ムズズなど遠方にも貸し出しを行なっている。重機のメンテナンスを担当するワークショップチーム、営業担当のマーケティングチーム、事務やスタッフの育成を担うオペレーションチームが存在する。

マーケティングチームの副責任者は、以前、ビーハイクの食堂で勤務していた。勤務態度が評価され、Torrent Computer and Screen Rentals（後述）での事務・セールスを経て、Torrent Plant & Vehicle Hire 立ち上げの際、現在の役職に指名された。

- Torrent Computer and Screen Rentals

2009 年に、パソコンの修理を専門とした小規模なエンタープライズとして設立、その後、パソコンやスクリーンのレンタルを行うようになった。法人の顧客が多いが、IT 機器の修理など、個人の顧客対応も行っている。職員は St John Paul II（後述）の卒業生が大半を占める。

- Beetech

2016 年に設立されたエンタープライズで、法人（主に銀行）の顧客情報をデジタル化し、データベースを作成している。顧客の要望に応じ、データ化した書類原本をビーハイク所有の倉庫内で保管するサービスも行っている。個人情報を取り扱う観点から、職員は、出勤時に携帯を含めた個人的な荷物を受付に預けることが義務付けられている。St John Paul II の Work & Learn の生徒を受け入れており、生徒は Beetech の職員とペアを組んで仕事を行い、実務経験を積む。

- Construction

ビーハイブの中で最も多い職員を抱えるエンタープライズ。ビーハイブ本部や各エンタープライズの建設、チロモニ地域の商店や住居の建設を手掛けている。季節によって異なるが、新施設の建設などが重なる繁忙期には 400 人程を雇用する時期もある。環境への配慮から、建設する建物には、焼成レンガではなく Hydraform Bricks と呼ばれる土壌安定化レンガを使用している。

- St John Paul II (JPPII)

IT 初心者から上級者まで学ぶことのできる専門学校。生徒は 400 人程で、13 以上あるコースから、自分のレベルや目的に見合ったものを探す。特徴として、どのコースを専攻した場合でも、Leadership の授業をとることができる。この授業は、チロモニ在住で JPPII の卒業生でもある校長が担当し、チームワークや統率力の育み方について、生徒との議論を交えながら講義を行う。2018 年から Work & Learn というプログラムが導入され、年間 50~60 人の生徒が、ビーハイブ内のエンタープライズ（主に Beetech）で働きながらコースを受講することができるようになった。

卒業後の進路について、優秀な生徒は、卒業後にインターンとして Beetech または JPPII で一定期間（その時によって変わる）働く権利を得る。Torrent Computer and Screen Rentals や Beetech の職員、JPPII 教師陣は、JPPII の卒業生が大多数を占める。チロモニ周辺の教会がドナーとなる奨学金制度があり、全校生徒うち、10%の約 40 人が奨学生で、授業料を全額免除されている。奨学金制度設立にあたっては、校長を中心とした教師陣が地域の教会をまわり、関係者との話し合いを重ね、同意をとりつけた。

- Mother Teresa Children's Centre (MTCC)

MTCC は、ビーハイブの他エンタープライズの利益によって運営されている託児所である。イギリスの Sure Start モデルを取り入れ、職員は、イギリスで幼児教育に携わった経験のあるスタッフやインターンの指導のもと、子どもとのかかわり方を実践している。インクルーシブ教育を重視しており、障害のある子どもや地域の貧しい家庭の子どもも受け入れ、マラウイで最先端の幼児教育を受けられる場所として、年々入所希望者が増えており、ボランティアや市外からも応募がある。

託児所としての役割のほか、組織内の 3 つのチーム（以下に記載）が、様々な機関と連携しながら、子どもを対象とした課外活動、保護者や住民が参加できる研修やワークショップの開催を行なっている。

- Extended School Workers Team

ビーハイブに隣接する初等学校 St James School の教室と MTCC 内の空き教室を利用し、月曜日から金曜日の放課後に、課外授業やワークショップを企画・開催している。課外授業では、初等学校の通常授業で教わる数学・チェワ語・英語・社会・科学・農業・ライフスキルを学年ごとのクラスに分け補講（期末テストに向けた復習が中心）を行っている。他、Beebike で余っている自転車を活用したバイククラブなどのスポーツ活動、チロモニの青年が地域の問題について議論し解決や改善に向けて活動するチロモニユースフォーラムなど、地域が抱える問題に焦点を当てたワークショップを多々主催している。

- Family Support Team

MTCC に子どもを預ける保護者の窓口となっており、保護者や初産の母親向けのグループカウンセリングや、DV や虐待の被害者への支援を行なっている。

- Outreach Team

MTCC とコミュニティを繋ぐ役割を担う。チロモニ周辺地域で家庭訪問を行い、家庭状況の聞き取りをもとにプロファイリングし、スポンサーファミリーを選定する際の情報収集を行っている。他、住民、学校、行政、市民団体、宗教団体、NGO など様々な機関と協力し、Child Protection Committee の形成・再活性化や、コミュニティに出向いて育児や DV について話し合うセッションや、パートナーである Seibo Maria と協働し、幼稚園の教諭を対象とした

研修を行っている。また、楽器やおもちゃを持って地域の幼稚園を訪問し、5分ほど、子どもたちと遊ぶ時間を設けている。

②代表ピーター・カタ氏によるメンタリングと講義

研修期間中、ビーハイブの代表であるピーター・カタ氏により定期的なメンタリングが行われ、研修員は、研修の内容や進め方についての相談、研修中に生じた疑問の解決を行うことが可能であった。また、ビーハイブ設立・発展の経緯、課題や今後の展望から、マラウイの近代史や政治経済、文化や言語についてまで、幅広い題材の講義を受けた。

カタ氏によるメンタリングと講義は、研修員のマラウイに関する基礎的な知識の習得、マラウイの社会開発の現状や課題の理解において、大きなサポートとなった。

③Mother Teresa Childrens' Centre での研修

テーマとの関連性から、研修の後半は MTCC で多くの時間を費やし、主に Extended School Workers と Outreach Team に同行し、地域の人々との関係づくりや他団体との協力手法について学んだ。

Extended School Workers では、15 以上あるワークショップや課外活動のそれぞれの担当者から、それぞれの構成や目的・目標について説明を受け、内、チロモニュースフォーラムを含めた 10 程のアクティビティを見学した。MTCC 設立初期に、他市民団体と協力しワークショップの教材作りを行った経験や、マラウイの環境系 NGO 職員を講師として招き、植樹・育樹に取り組むクラブ活動を主催した経験がある。スポーツでは、マラウイのクリケット協会から指導員を定期的に招き、子どもたちに公式ルールの説明やプレーのアドバイスをを行っている。MTCC 側の担当者の入れ替わりが頻繁に行われるため、どの試みも定着し辛いのが現状のようである。

Outreach Team では、研修・ワークショップを開催する他、地域の家庭を訪問、家庭状況をヒアリングし、スポンサーファミリー選定のためのプロファイリングを行っている。スポンサーファミリーは MTCC の託児所を無料で利用できる他、家庭状況によって、MTCC が連携しているキリスト教系団体からマナパックと呼ばれる食糧（dehydrated rice casserole）の供給を定期的に受けている。研修期間中に家庭訪問に同行することはかなわなかったが、家庭訪問実施からスポンサーファミリー選定までの過程について学んだ他、Seibo Maria をはじめとした連携団体とのミーティングや合同研修にオブザーバーとして参加した。異なる組織体制をもつ団体同士が、同じ目標に向けて、あるいは、課題解決に向けて協力する手法を、その難しさも含め学んだ。

④Mother Teresa Childrens' Centre でのインパクトアセスメント

MTCC では、事業拡大のため、将来外部のドナーから資金援助を受けることを想定し、2017 年に、MTCC のマネージャーと各チームのリーダー計 4 名のインパクトアセスメントチームが結成されたが、活動は停滞していた。研修中、ビーハイブのパートナーであるイギリスのチャリティ団体の代表が来訪し、チームの再始動を試みる中で、MTCC のマネージャーとチャリティ団体の代表から研修員のチームへの参加が提案された。研修員は実地調査の経験がなかったが、所属団体と関係機関に相談の上、当初の研修期間を一か月延長し、研修生という形で参加する運びとなった。

最初の会議では、週に一度全員参加のミーティングを行うことが決定されたが、実際に全員が参加したのは最初のみとなった。研修員が帰国するまでの間にミーティングは 3 回開催された。ドナーから支援を受けるためには、インパクトアセスメントを行いその結果を提示することが重要という前提のもと、qualitative method と quantitative method を両方取り入れることになり、前者については、研修やワークショップの参加者の意識の変化をアンケート形式で確認する方法がよいという意見が出た。後者については、既に Extended School Workers が収集していた、初等学校の最終学年の統一試験の合格者数のデータを参照することや、初産の妊婦の健康と子育てについての研修に参加したアポストリックの妊婦が研修後に病院に検診を受けに行ったケースを数値化するなどの意見が出た。

3 回の話し合いの結果、各ワークショップ・研修を担当する職員が、どのような質問を参加者にと、参加前と参加後の変化を確認することができるかについて考え、所属するチームのリーダーに書面で提出、書面をもとにチームリーダー同士が話し合い、マネージャーに共有することになった。すべての書面が揃う前に研修は終了した。

2-2. 研修テーマについて

本研修では、マラウイでの、社会起業を通じた地域活性化の取り組みと、社会開発において、NGO が碑益者や他機関とどのように関わるべきかの模索をテーマとした。

可視化された情報がないため、地域活性化の程度について正確に記述することは困難であるが、ビーハイブが、雇用創出や情報伝達を通じて、チロモニ地域の人々の生活に影響を与えてきたことは確かである。職員やワークショップ参加者へのインタビューの中では、ビーハイブが出来てから何が（あるいは何か）変わったかという質問に対し、以前より治安がよくなった、子どもへの虐待（が報告されるか数）が減った、と言った声がきかれた。今後、インパクトアセスメントが実施され、具体的な成果が可視化されることが期待される。

また、研修内容の記載からも分析できるように、パートナー団体を主として、多くの団体・機関との連携が確認された。計画段階から事業実施中までミーティングを通じて何度も議論を重ねることで、いくつもの合同事業を実現させている。

2. 考察・提言

3-1. 結論

受入機関では、設立当初から住民のニーズに寄り添う姿勢を重視してきた。現在では、チロモニ地域の雇用の中心となっているだけでなく、飢饉発生時の地域住民への食糧供給を政府によって義務付けられるなど、社会的な役割を担う組織に発展した。住民からの期待も大きく、事業は拡大の一步を辿っている。

イギリスのパートナー団体からの物的および人的支援を各エンタープライズで活用しているが、事業拡大に比例し、前者に対する需要と供給の差は大きくなるばかりで、どのようにしてそのバランスを調整するかが、受入機関が今後更に発展していく上での課題となると考える。

研修を通して、社会開発事業の実施において、地域が抱える問題への的確な分析、住民のニーズ把握とその為の対話がいかに重要であるかについて理解を深めることができた。

受入機関は、NGO だけでなく様々な機関と連携し、違いを認識した上で、互いの強みを生かした事業を行ってきた実績があり、その協力手法には、日本の国際協力分野も学ぶべきものがあると感じる。

社会開発における援助の傾向や関係機関の役割、現場で起こりうる問題やその対処方法など、今後、研修員が所属団体の事業をサポートする上で不可欠な要素を学べたことは、大きな成果である。

3-2. 本研修成果の自団体、NGO セクターの組織強化や活動の発展への活用方針・方法（可能な限り具体的に記載下さい）

3-2-1. 自団体への活用方針・方法

社会開発の現状理解と事業内容への理解が深まったことにより、業務に効率的に取り組めるようになり、研修前と比較して、事業担当として業務に統合的に関わるできるようになった。具体的には、研修後、事業に関するデータの分析、資料の作成などの業務遂行能力が高まった。今後、事業実施における中・長期計画の作成補助やリスクマネジメント作業補助、また、インターンへのオリエンテーションを行う予定である。

3-2-2. NGO セクターへの活用方針・方法

本研修の研修成果の NGO セクターや他団体への還元方法については、以下を想定している：

① JANIC 主催の本研修オリエンテーションでの研修報告

本研修は NGO の中堅職員を対象に人材育成を通じた組織強化を目的としているが、中堅職員が必ずしも実務経験豊富とは限らず、派遣対象者のように長期実務経験が初めてというケースも存在し得る。例年開催される JANIC 主催の本研修オリエンテーションで経験談を共有することにより、本研修の意義を広めることが出来ると考える。

②他団体主催研究会／意見交換会／協議会等での情報共有、発言

日本の NGO の課題である人材育成の観点からも、外務省や JICA など、他団体が主催する研究会や意見交換の場に積極的に参加し、当研修で得た成果を還元したいと考える。

③最終報告書の提出（本報告書）

本報告書は外務省及び JANIC において保管／管理され、他団体が活用することが可能である。

尚、既に行った広報活動は以下である：

①グローバルフェスタ JAPAN 2018

「NGO 職員によるキャリアセミナー＆個別相談会（JANIC 主催）」において研修についても報告（2018 年 9 月 29 日、お台場・センタープロムナード）

② 所属団体報告会における研修報告

代表理事と 2 名による報告会において研修について報告。

事前の広報を所属団体ホームページやソーシャルネットワークで行った。

（2018 年 12 月 19 日、東京都文京区汐見地域活動センターにて開催）

③所属団体会報での研修報告

会報は所属団体のホームページでも公開しており、誰でも閲覧可能である。

（2018 年 12 月 25 日発行、『CanDo アフリカ』第 85 号）

3-3. テーマに関する日本の国際協力分野への提言

本研修を通し、社会開発において継続的な協力は不可欠であること、また、住民との対話の重要性を再認識した。ビーハイブでは、住民のニーズでエンタープライズが多層化し、相互に連携しており、その規模もさまざまである。日本の国際協力は、1 つの NGO による 1 つの活動で完了、という形が多いが、住民との対話に力を入れ、現地のアクターと効果的に連携することにより、継続性が可能になると考える。

3. 団体としての今後の取り組み方針（団体の責任者がご記入ください、800 文字程度）

アフリカ地域開発市民の会（CanDo）としては、ビーハイブでの研修を通して住民との対話について学び、多様な活動を経験した研修員を、後方支援の事業担当だけでなく、今年度マラウイで開始した事業において、1 年のうち一定期間は現地業務担当とする。

当会は、マラウイでもケニアにおいて行なった住民参加による社会開発を目指しているが、援助依存体質で難しいという意見が関係機関から言われている。今後、事業を進めていく中で、研修員のビーハイブの研修における住民との対話についての気づきをいかせることと思う。

ビーハイブはマラウイの旧宗主国であるイギリスとの関わりが深い。イギリス人とマラウイ人と接する場にいた研修員はその関係性についても気づくところがあった。日本はアフリカにおいては中立性があるといっても、「援助する側」とみられる NGO のスタッフには「上から目線」の懸念がある。当会の他のスタッフがその気づきを共有することで、マラウイ人スタッフや今後、関わる人たちとの関係をよいものにする。

ビーハイブ代表のタカ氏によるメンタリングと講義で、研修員はマラウイについて多くを知ることができた。文章にまとめて、会報に掲載することを考えている。

研修員が帰国後に開催された、グローバルフェスタ JAPAN 2018 において、当会のブースではパネル展示のほか、机をボードゲームのバオで遊ぶコーナーとした。研修員がビーハイブのスタッフから覚えたルールを教えて、2 人で遊んでもらう。年齢もさまざまな人たちがゲームに夢中になり、ほとんどマラウイ

が未知だった人たちの記憶に残るはずである。アフリカ理解の取り組みのひとつとして、ゲームコーナーは継続する方針である。

4. その他

5－1. 本プログラムや事務局側に対する提案・要望等

募集要項には、中堅職員を対象としたプログラムであるとの記述があるが、個人に見合った目標や研修テーマを設定することで、どの役割の職員でも多くのものを得ることの出来るプログラムであると感じる。この度、現場経験のない新人職員である研修員の派遣を許可していただいたことに、大変感謝している。今後も本プログラムが継続されることを希望する。

5－2. 写真類及び研修員が受入先機関に提出した報告書類等があれば、添付写真添付。



JPⅡ内の教室。リーダーシップの授業が行われる他、学生がグループワークをしたり、討論をする場として使用されている。



Beehive Plant & Vehicleで貸し出している重機



Beebikesで壊れた自転車を修理するスタッフ。



Beehive Tailoring Schoolの教室外観



Beehive Tailoring Schoolに保管されている、イギリスから寄付されたマシン。

MONTHLY PRODUCTION		Produced	Sold
Stock			
Pockets	150	145	5
Phone Cases	150	145	5
Shacket no Cam	150	145	5
Small Zip Purse	150	145	5
Small Round Case	150	145	5
Gift Bag Sets	25	25	0
Pleated Bag	50	45	5
Shocking Bag	50	50	0
Simple Square Pouch	20	20	0
Bike Bag	50	50	0
Fabric Cloth and Nylon Socks			

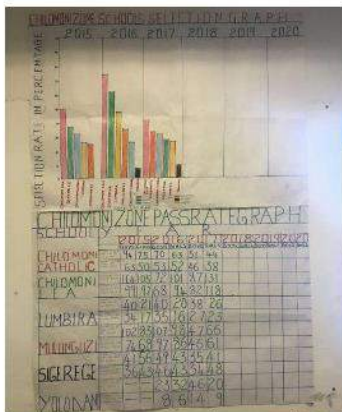
Cycle of Goodにある、月次目標を書き込んだボード



Cycle of Goodで作業するスタッフ。



MTCC Extended School Workersの課外事業。数学の補講を行っている。



MTCC Extended School Workersのオフィスに掲示された、チロモニ周辺の初等学校のデータ



MTCC Outreach TeamとSeibo Marialによる幼稚園の教諭向け研修。



MTCC Outreach TeamとSeibo Marialによる合同ワークショップで提案された、障害のある子どもも遊べるおもちゃの例。